

平成24年度臨床研究テーマ成果報告書

診療科（部）名：顎口腔機能治療部
研究期間：平成23年4月～継続中
研究課題名：睡眠中の嚥下動態に関する研究
研究課題の概要及び成果： <p>嚥下障害患者では、睡眠中の唾液誤嚥が誤嚥性肺炎の原因と言われている。睡眠中は嚥下反射の閾値が上がるだけでなく、咳嗽反射の閾値の上昇もあいまって、唾液誤嚥の頻度が上昇すると推察されている。しかしながら、睡眠中の嚥下反射閾値を明らかにした報告はない。唾液誤嚥により生じる肺炎の予防法を開発するためにも、睡眠中の嚥下動態を明らかにする必要がある。本研究では、嚥下潜時を指標に、覚醒時と睡眠時、各睡眠ステージでの嚥下反射閾値の比較検討を行なう。</p> <p>健常者を対象に行った。覚醒時、睡眠時に簡易嚥下反射誘発試験（SSPT）を行い、嚥下反射の評価を行った。0.1mlの蒸留水を60秒間隔で嚥下が生じるまで注入し、最初の注入で嚥下が生じた場合を陽性、嚥下が生じなかった場合を陰性と定義した。陽性の場合には嚥下潜時を計測した。また、嚥下が生じる最小限の蒸留水量を嚥下閾値量とした。</p> <p>簡易嚥下反射誘発試験の結果は、覚醒時と睡眠時との間に有意差が認められた（<math>p&lt;0.01</math>）。嚥下閾値量は、覚醒時より睡眠時のほうが有意に高かった（<math>p&lt;0.01</math>）。また、健常者4名を対象に脳波にて睡眠段階を判定しながら上記実験を行った。結果、嚥下潜時は、浅い睡眠（Stage1, 2）と比較して深い睡眠（Stage3）で有意に延長した（<math>p&lt;0.01</math>）。</p> <p>以上の結果から、覚醒時と比べて睡眠時は嚥下反射が低下しており、睡眠時では浅い睡眠（Stage1, 2）と比較して深い睡眠（Stage3）で嚥下反射が低下している可能性が示唆された。今後は、被験者の数を増やし、有病者でも検討を行っていく予定である。</p>
上記概要・成果に関連する図表等